

公民館だより なかがわ

第485号

令和5年3月31日
発行 中川地区公民館
TEL.Fax : 679-2501

【一般講座】

「春の寄せ植え」講座

日時：4月26日（水）10:00～12:00
場所：中川地区公民館 駐車場（雨天時は集会室）
講師：佐藤 正幸さん（ペンションアップル）
持ち物：園芸用手袋、花切はさみ、飲み物など、
汚れても良い服装（エプロンなど）
※屋外になりますので、防寒具などもお持ちください。
材料費：2,500円
（つり銭のないようにお願いします）
対象：中川地区民
定員：先着20名程度
締切日：4月14日（金）



参加者募集

「刺し子」体験講座

日時：5月12日（金）10:00～12:00
場所：中川地区公民館 図書室
講師：高木 直さん（山形大学名誉教授）
持ち物：裁縫道具、ものさし、チャコペン、
飲み物など、必要な方は眼鏡
材料費：500円（つり銭のないようにお願いします）
対象：中川地区民
定員：先着10名程度
締切日：5月2日（火）
※写真のような可愛いコースターを1点作ります。
初心者の方大歓迎です！



お問合せ・お申し込み先：中川地区公民館（☎679-2501）

4月 行事予定



- 4/4(火) 中川地区会長会総会
公民館運営協議会総会
中川地区合同懇談会
- 4/7(金) 粋いき倶楽部代表者会議
第1回主事部・体育部合同会議
第1回体育部会
- 4/8(土) 中川小学校入学式・北中学校入学式
- 4/11(火) 福祉村第1回実行委員会
- 4/14(金) 第1回パソコンクラブ
第1回子ども会育成会
- 4/18(火) 第1回そば打ち教室
- 4/19(水) 中川地区戦没者追悼式
- 4/20(木) 第63回中川福祉村村議会
- 4/21(金) 第1回ウォーキング（職員不在時間あり）
- 4/25(火) 地区公民館職員合同会議（職員不在時間あり）
- 4/26(水) 一般講座「春の寄せ植え」
- 4/29(土) 会長会・中川小PTA 顔合せ

各教室の予定

- グラウンドゴルフ愛好会
（月曜日） 4/10、17、24
- 詩吟教室 （火曜日） 4/11、18、25
- ラージピンポン愛好会
（木曜日） 4/6、13、20、27
- スポーツ麻雀愛好会
（木曜日） 4/13
（土曜日） 4/8、22

令和5年度

役員名簿（敬称略）

新体制でのスタートとなります。どうぞよろしくお願いいたします。

◎会長 ○副会長

※民生児童委員は12月より新体制になっております。

地 区	地区会長	副会長	公民館主事	体育部	子ども会育成会	民生児童委員
糸 目	稲毛 栄一	稲毛 進	稲毛 重雄	五十嵐 清己		（仙石地区兼務）
仙 石	佐藤 修司	稲毛 敏 小川 勉	柴田 浩彰	鈴木 隆之	稲毛 和浩	稲毛 善司
泉 川	木村 雅美	木村 郁子	佐藤 賢事	木村 将裕	齋藤 裕之	（金谷地区兼務）
金 谷	○高橋 源四郎	鏡 清明 吉田 邦利	堀部 清正	鏡 耕大	吉田 史弥	小関 秀之
足ノ口	山田 一彦	斉藤 耕一	山口 重光	山田 雄介	山田 杏伊	（権現堂地区兼務）
甲 石	鈴木 孝	鈴木 章	木村 弘明	加藤 英治	松浦 康雄	◎松浦 敏雄
高 野	◎鈴木 英明	佐藤 友治 関伊口 好晴	加藤 昭二	松本 友也	寒河江 寿	○澁谷 正秋 鈴木 英明
薄 沢	齋藤 裕則	齋藤 賢蔵	齋藤 忠雄	齋藤 真志	齋藤 恭平	齋藤 由貴子
永 野	中川 賢治	齋藤 良文 齋藤 秀昭	山川 浩昭	山川 秀明	佐藤 健悟	山川 恵子
蔵 王	鈴木 祐二	石黒 清	菱沼 秀夫	佐藤 裕也	堀江 敦	吉田 和子
権現堂	齋藤 秀明	齋藤 房雄	齋藤 弘	齋藤 裕介	佐々木 菜香	齋藤 正明
小 倉	工藤 喜則	工藤 政憲	荒井 孝範	伊藤 勝宏	加藤 司	工藤 和子
棚 木	岡崎 康	伊藤 賢一	伊藤 勝之	伊藤 勝之		加藤 幸治
坊 平	眞篠 利光	大沼 邦充				（蔵王地区兼務）

職員紹介

館 長

山田 君夫

事務長

酒井 ^{あきよし} 昭孝

地域活動推進員

柏倉 美穂

地域活動推進員

三瓶 良子

新任のあいさつ



3月31日をもちまして退職された、佐藤友治事務長に代わりまして、4月1日より事務長に新任いたします、酒井昭孝と申します。自宅は金生地区で、前職は山形県青少年育成県民会議の事務局に、前々職では県の職員として奉職しておりました。

前事務長には及びませんが、山田館長、柏倉・三瓶両推進員の協力を仰ぎながら、これまでの経験を地区の発展及び活性化に少しでも寄与できるよう努力する所存ですので、よろしくお願いいたします。

事務長 酒井 昭孝

粋いき倶楽部閉講式

2月24日(金)「令和4年度中川粋いき倶楽部閉講式」が開催され、来賓として地区会長会松田会長の挨拶の後、事業報告、決算見通しを報告し承認されました。その後、DVDの鑑賞会が行われ最後の事業を楽しみました。また、会員の皆さんに一言ずつ1年間の感想を伺い、「全部出席して楽しかった」「普段出かけないので、出かけるのが楽しかった」「DVDも面白かった」など、たくさんうれしい言葉を頂きました。

終了後には、場所をフジヤ旅館に移して昼食会が行われ、1年を振り返りながら和やかな時間を過ごすことができました。

今年度の粋いき倶楽部も、予定変更はありましたが、9回全て開催することができました。来年度も会員の皆さんが楽しんで参加できるような事業、研修を考えていきたいと思っています。



女性学級きらり閉講式

3月14日(火)「令和4年度女性学級きらり閉講式」が行われ、事業報告と決算見通しを報告し承認され、4月から「一般講座」へと変わりますが、その申込方法などの説明後、会員の皆さんにこれまでの感想を伺いました。「フラワーアレンジメント」「アクセサリ作り」「紅茶教室」「ボウリング」や「映画鑑賞」など、「どれもとても楽しかった～」「一般講座でも参加したい!」との声を頂き、本当にうれしく思います。

閉講式の後には、つかさ花店さんより来ていただき「ブッタナッツアレンジ」が行われました。「幸せを呼ぶ果実」とも言われる木の実に、ドライフラワーを詰めていきます。どこに何を置くか、色合いや形のバランスを見ながら詰めていくのが難しかったですが、それぞれ個性的で素敵な作品が出来上がりました。



出前スポーツ教室

「足腰元気体操」

2月28日(火)出前スポーツ教室3回目の「足腰元気体操」が山川先生指導のもと開催されました。貯筋体操の歌に合わせながら、イスに座って手足を動かしたり、つかまって足腰を伸ばしたりしながら、体をほぐしていきました。筋肉は使えば使うほど貯まるとのこと。皆さん、普段からたくさん筋肉を使って貯筋しましょう!



パッチワーク教室

3月3日(金)、17日(金)、31日(金)「パッチワーク教室」が行われ、型紙から作成していた作品が、それぞれ出来上がりました。皆さん、大変だ～と言いながらも、とっても楽しそうに作業していたのが印象的でした。バックなど手の込んだものばかりで、素晴らしい作品に仕上がっていました。



施設訪問

3月3日(金)、福祉村主催の施設訪問が福祉村役員、会長会、民生児童委員の参加を得て開催されました。今年は、社会福祉法人牧人会山形育成園・山形ひかり学園 白鳥 勇二園長、養護老人ホーム 蔵王長寿園 川口 弘子園長の2施設よりお越しいただき、概要説明・質疑応答が行われました。コロナウイルス感染防止のため、3年前より施設への訪問は行っておりませんが、現況等も含めてお話していただくことで、改めて各施設について深く知ることができました。これからも福祉村の事業等を通して、各施設と中川地区の連携を強めていければと思います。

おらほの中川〈地域の話題シリーズ 第百七十四弾〉

「昭和考、問わず語り（その26）」

不況、冷害の窮状

昭和四年以降九年頃まで続いた不況と冷害の影響がこの地の農民を苦しめた。

当時の山元村を取材したルポライター・佐野眞一は、その窮乏ぶりを著書「遠い山びこ」に次のように記述している。

「金融恐慌の余波による生糸相場の暴落が山元村を襲った昭和五年の時点で、当時二百九十七戸あったこの村からの出稼ぎ人は、二百六十人を数えた。その職業別内訳は、工女五十五人、山元村地区内の年奉公を含めた農業五十一人、女中二十五人、日雇い十五人、番頭五人、醜業婦五人などとなっている。」

また、その後襲われた昭和九年の冷害が山元村に更なる深刻な打撃を与えた。

何人かの古老の証言が残っている。

「当時私は、小滝の庄屋で農夫頭をしていた。その年は、土用の時でも毎日毎日水車が回っていた。三枚あった蓑も雨のためすべて腐った。その家には、普通だと例年百三十表もとれる米が、その年に限ったたったの七俵だけという驚くほどの凶作であった。」

「曾我の雨から降り始め、百日間雨が降り続いた。その間、太陽が顔をだしたのはわずか三回きりだった。それも薄日で弱く照ったのみだった。雨といっても霧のような雨で、働いているときは生温かいため蓑一つでも十分だったが、働かないときは逆に寒く肌こや合わせは放せなかった。」

毎日毎日雨に濡れるため荷縄、蓑、笠は乾く暇がなかった。例年我が家では六十俵とれる米がこの年は十六俵しかとれなく、しかもすべて砕け米だった。米びつがいつもからっぽの有様だった。」

山元村では、この昭和九年の冷害凶作で、二百八十六戸の村から、男百八人、女百十七人の計二百二十五人の出稼ぎを数える事態となった。年齢別では、十五歳以下三十八人、二十歳以下百五人、二十五歳以下五十五人、三十歳以下十九人などからなり、職業別では、製糸業四十七人、農業三十九人、

店員二十四人、紡績工場二十二二人、職人二十三人、子守り十四人などで占められた。

出稼ぎ先は、山形県内が百一人、あとは東京、茨城、神奈川、名古屋、大阪などに散らばった。村には年寄りばかりが残り、消防団も解散せざるを得なかった。

山元村には、大正十二年に初めて電灯が灯ったが、料金未納の家が続出し、ほとんどの家が元のランプ生活に戻ったという。税金も大半の家が滞納し、この家も暗いランプの下で家族が体を寄せ合い、サツマイモやカボチャだけで飢えをしのいだ。

娘の身売り

昭和九年十月、東京朝日新聞は、「東北の凶作地を見る」という十七回連続のルポを特集した。

このルポのうち、最上地方を取材した回では、「売られる最上娘、哀切・新庄節」の見出しで、次のような報告がなされた。

「身売りがふえるだろうというので、身売り防止の方策を立てた新庄警察署が主になって、先頃村々で「娘を売るな」と座談会をやって歩いた。」

娘一人の身代金は、年々四五百円ないし八百円、しかし周旋屋の手数料や着物代や何やらを差し引かれて実際に親の手に渡るのは、せいぜい百五十円くらいだ。可愛い娘を手離しても、百五十円の金を握りたい、一つの悲風習でもあろうが、やはりそれも詮じつめると食えない苦しさからに違いないだろう。

しかも、娘を売った親たちは「凶作で米がないから、年々が明けても村の懐には帰るな」というのだ。農村の窮乏もここに至っては正視するにしのびない。（写真①は、昭和九年、人買いの手から救世軍によって救出された娘たち。「女たちの昭和史」へ大月書店刊より）。

事態は、山元村でもそう変わらなかった。昭和九年の大凶作を身を持って体験した地元民の証言によれば、村人は口には出さなかったが、娘をひそかに身売りする家も少なくなかったはずだ、と言っている。山元村に近い伊佐沢村（現長井市）では、「娘身売りの場合は、当相談所へ御出で下さい」という張り

甲石地区 高橋 正之

紙が役場に貼りだされた。（写真②は、昭和九年十一月、同村の相談所で、娘の身売りの相談を受ける村長と駐在巡查「昭和三年の全記録」へ講談社刊より）。

山形県保安課の調査では、昭和九年十一月までの県内の娘身売り数は、三千二百九十八人に上った。その内訳は、芸妓二百四十九人、娼妓千四百二十人、酌婦千六百二十九人だった。娼妓千四百二十人のうち、八十%に当たる千四百一十二人は、東京の花街への身売りだった。

この当時、東京には約七千五百人の娼妓がいたことが警視庁の調査で明らかになっている。これできくと、山形県出身の娼妓は東京で働く全娼妓のほぼ六分の一に近かった。

金融恐慌と冷害凶作によってもたらされたこうした事態に対し、もつとも性急な形で示された反応が、日本に軍部独裁への道を突き進ませる端緒となった昭和十一年の「二・二六事件」だった。これに参加した兵士は、疲弊した農村出身者が多かったといわれる。

〈次回は、時代を遡り昭和四年以降の政治や軍部の状況について記述する予定です。〉

（写真①）



（写真②）

